

平成28年度ユネスコスクール年次報告書

報告期間：平成28年4月～平成29年3月

1. 学校概要

学校名 愛知教育大学附属岡崎小学校

種別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫教育
 中学校 中高一貫教育 高等学校
 教員養成 技術/職業教育
 特別支援学校 その他 ()

所在地 〒444-0072
愛知県岡崎市六供町八貫 15

E-mail aoi@op.aichi-edu.ac.jp

Website aoi@op.aichi-edu.ac.jp

児童生徒数 男子 316名 女子 283名 合計 599名
 児童・生徒の年齢 6歳～12歳

2. 実施活動（複数選択可）

- 地球規模の問題に対する国連システムの理解
- 国際理解
- 世界遺産
- 平和・人権
- 環境
- 気候変動
- 生物多様性
- エネルギー
- 防災
- 食育
- 伝統文化
- そのほか ()

3. 活動内容

(1) 1年間の主な活動内容について記載願います。

①国際理解

◎実践1

6年英語科「Introduce Hatcho Miso 世界へ発信 岡崎ブランド」

ア ねらい

- ・外国の人に八丁味噌の魅力を伝える活動を通して、日本文化の理解を深め、日本文化のよさを伝えるために、英語表現を身につけるだけでなく、相手が理解しやすくなるコミュニケーションスキルを用いていく子どもにしたい。
- ・自分の伝えたいことを相手に理解してほしいという思いをもって、積極的に外国の人とコミュニケーションを図ろうとする子どもにしたい。

イ 内容



「八丁味噌をもっと世界で有名にしたい」と強く願う八丁味噌工場の社長に出会った子どもたちは、自分たちも手助けをしたいという思いをもった。八丁味噌の魅力を外国の人に伝えるために、八丁味噌の歴史や特徴を調べ、必要な英語表現を追究していった。八丁味噌の魅力を外国の人に伝えるために必要な英語表現やコミュニケーションスキルを考えた。子どもたちが、追究してきた英語表現やコミュニケーション

スキルを用いれば自分の思いを外国の人に伝えることができると感じたときに、実際に外国の人を味噌蔵に招いて案内し、八丁味噌の魅力を伝えた。活動の後に行った仲間とのかかわり合いでは、相手に思いを伝えようとして用いたコミュニケーションスキルが有効であった喜びや八丁味噌の魅力が理解してもらえた満足感を味わう姿が見られた。その後、外国の人との会話やそのときに感じたことを振り返ることで、今後も日本文化の理解を深め、外国の人に日本文化のよさを伝えたいという思いをもって、積極的に外国の人とコミュニケーションを図る姿が見られた。

◎実践2

ボールステイト大学バリス校との交流

ア ねらい

- ・バリス校児童の交流訪問を通して、異文化理解を深める子どもにしたい。
- ・小さな親善大使として、お互いの文化を学び伝え合い、両校の友好を深め、交流を推進する役割を担っていける子どもにしたい。

イ 内容

本校が交流事業を行っているバリス校は、愛知教育大学の姉妹提携しているアメリカインディアナ州にあるボールステイト大学の附属学校である。9回目となる今回の訪米にも、多くの児童が参加を希望した。そのなかから抽選で5・6年生の各10名が交流訪問の小



さな親善大使として選ばれた。出発の日、長旅への不安はあったが、どの子どもも期待を胸に抱いていた。現地の空港では、横段幕を持ってバリス校の先生が出迎えてくれた。そして、バリス校到着時は、子どもの名前のプラカードを持ってホストファミリーが出迎えてくれた。移動の疲れを吹き飛ばす笑顔で温かく迎えてくれた。翌日のオープニングセレモニーでは、代表児童が英語で自己紹介や、歌やバイオリンなど特技を披露した。また、バリス校の代表児童は日本語で歓迎のスピーチを、全員で「こいのぼり」など日本の歌を歌ってくれた。この交流が、両校の子どもたちに大きく影響していることを実感した。翌日からは、幼稚園児から中学生まで多くのバリスの子と交流した。なんとか自分の考えや思いを伝えようと四苦八苦する姿、言葉の壁を越え共に夢中になって遊ぶ姿、折り紙やあやとりなど日本の遊びを寄り添いながら伝える姿など、日に日に積極的になる様子が見られた。バリスの子どもも、日本語で話しかけてくることが増えた。お互いにもっと知りたいという思いをもち、自然にふれあうことができるようになった。両校の友情が深まるよい交流となった。

②平和・人権（本校では「共生教育」として行っている）

◎3年くすのき学習（総合的な学習の時間）

「みんなのいいところ いっぱい見つけるよ

—附属特別支援学校 いっしょに楽しく お友だち交流—

ア ねらい

- ・附属特別支援学校の子どもたちとの交流を通して、附特の子どもたちの人格と個性にまで目を向けられるような子どもにしたい。
- ・附属特別支援学校の子どもたちと一緒に楽しく遊びたいという思いや願いを実現するために、よりよい接し方を見つけ出そうと、仲間と互いの考えや知恵を出し合うことよさを感じ、生活のなかでも取り入れようとする子どもにしたい。

イ 内容

自分たちと同じように元気よく体を動かして遊ぶことが好きな附属特別支援学校の友だちが、工事のため遊具を使えないことを知った子どもたちに、特別支援学校の友だちと出会わせた。子どもたちは、その学級のペアと附属小学校の遊具と一緒に遊ぶお友だち交流をしたいと感じるようになり、交流を繰り返すことで、もっとペアと仲よくなって一緒に楽しく遊びたいという思いや願いを抱くようになった。思いや願いをもった子どもたちは、ペアと仲よくなって一緒に楽しく遊ぶために、再び自分たちで遊びを考えて、遊ぶようになった。活動を始めると、ペアが楽しんでいると感じている子どもと、楽しんでいるかどうかわからないと感じる子どもが出てきた。ペアは何となく遊んでいるだけで、楽しんでいるかどうかは、わからないと気づいた子どもの考えをもとに、学級全体で考えた。



ペアの様子から、ペアは楽しんでいると感じている困りごとが出たタイミングで、ペアと自分たちが一緒に楽しく遊ぶことができているというグループの活動と比べることができるように、互いの交流を撮影したビデオ映像を視聴した。それぞれの違った考えに葛藤するなかで、自分たちがやりたい遊びをしてもらうのではなく、ペアと一緒に楽しめる遊びにすること

が大切ではないかと気づき、仲間の考えを取り入れ、仲間とともに、ペアとより一緒に楽しく遊べるように、活動を見直した。見直した活動によって、ペアと一緒に楽しく遊ぶことができたかどうか、ペアから喜びの感想を伝えてもらうことで、がんばって活動してきた喜びを感じた。そして、これからもペアと交流したい、もっとよく知りたいと感じたり、これからの生活のなかでも、よりよい接し方を見つけ出し行動したりすることによさを感じる姿が見られた。

③食育

◎5年家庭科

「手早く作るよ アイデアたっぷり ペアのための手作り弁当」

ア ねらい

- ・調理されたものには、作り手の思いが込められ多様な形があるなかで様々な工夫がされていることに気づき、食に対する見方や考え方を広げ、自分の生活に合った工夫の仕方を見つけてこれからの食生活に生かしていく子どもにしたい。
- ・ペアのための弁当作りを通して、材料や調理方法について考えることにより、調理には、好みやおいしさだけでなく、利便性や安全性なども大切であることに気づき、それらの視点を大切にして調理することのできる子どもにしたい。

イ 内容

弁当作りに出会った子どもたちは、弁当作りの楽しさと考えたおかずについて思うように作ることができない難しさを感じつつも、ペア交流で大切にしている「ペアに何かしてあげたい」という気持ちと重なり、「ペアのためにお弁当を作ってみたいな」と思うようになった。子どもたちは、ペアのことを考えながら、ペアの好みや盛り付けなどの視点をもち、入れるおかずや調理方法の工夫について追究を始めた。はじめは、いつも作ってもらっている家族の弁当をイメージし、家族にアドバイスをもらい、弁当作りをしていた。しかし、限られた時間のなかで弁当作りに取り組んでみると、多くの種類のおかずを作ることが難しいことに気づき、短時間で完成できる調理方法を工夫したり、加工食品を使って作ったりし、作りたい弁当に近づくことに目を向けていった。その後、学級でペアが喜ぶ弁当にするために工夫したことを話し合うかわり合いの授業を行った。手早く作ることや安全面を考えている仲間の調理の工夫の様子を見たり、試食したりしたことで、ペアの好みや盛り付けだけでなく、利便性や安全性という視点もふまえて考えていくことが、ペアを喜ばせるためには大切なことであることに気づき、弁当づくりをさらに追究した。そして、自分が納得できる弁当ができたところで、ペアに食べてもらい、感想を聞いた。本学習を通して、食に対する学びが、ペアに生かされたことに喜びを感じるとともに、多様な視点をもち、これからの食生活をよりよくしていこうとする姿が見られた。



(2) 活動時間について（下記から選択して下さい。）

- 通常の授業時間を使用（総合的な学習の時間を含む）
- 時間外活動の時間を使用
 - ユネスコクラブの活動として実施
 - その他（

)